

<前回>キルケゴール

1. 思想的特徴

①宗教批判者としてのキルケゴール(1813 ~ 1855)

②反ヘーゲル主義→実存主義の先駆者 ③仮名と実名の二種類の著作

2. 宗教批判(現代批判と市民社会のキリスト教)

・「コルサール事件」(1846年)、週刊新聞『コルサール』(ゴシップ暴露)

・キルケゴールの現代批判(『文学評論』の第2章)

3. 単独者の思想

自己論：自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者

→ 本来的な自己になるという課題

→ 不安と絶望の可能性

関係存在としての自己の存在根拠と神

4. 実存弁証法と真のキリスト者へ道

「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」：精神の発展プロセス

宗教性AとBとの関係(宗教性一般の立場からキリスト教へ)

宗教性B：同時性、あるいは絶対的逆説性

(『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』)

5. 個人と社会・共同体との関係、個人の主体性の強調→単なる抽象論、

大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者

6. 思想史の中のキルケゴール

宗教批判の系譜、20世紀神学(弁証法神学、ポスト・モダン神学)へ

7. 弁証法神学とは何だったのか

1. Dialectical Theology

A title applied to the theological principles of K.Barth(q.v.) and his school on the ground that, in distinction from the dogmatic method of ecclesiastical orthodoxy, which treats of God as a concrete Object (via dogmatica), and the negative principles of many mystics, which forbid all positive affirmations about God (via negativa), it finds the truth in a dialectic apprehension of God which transcends the 'Yes' and the 'No' of the other methods (via dialectica). Its object is to preserve the Absolute of faith from every formation in cut-and-dried expressions.

After the publication of Barth's Römerbrief in 1919 the Dialectical Theology rapidly spread, ... (Cross/Livingstone(eds.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Third Edition, 1997, p.476)

Alister McGrath(ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought*, 1993.

Religion in Geschichte und Gegenwart, Vierte Auflage (RGG⁴), Band1-8, Mohr Siebeck, 1998-2007.

2. 現代神学の発端(自由主義神学・神秘主義批判)、『時の間』

バルト、ブルンナー、ブルトマン、ゴーガルテン、トゥルナイゼン、メルツなど。

近接して、ティリッヒ、ボンヘッファー、ニーバー兄弟など。

↓

1920年代から60年代にかけて、プロテスタント神学の主潮流を形成する。

ラーナー、バルタザールなど、カトリック神学への影響。

日本：高倉徳太郎、熊野義孝、桑田秀延、滝沢克己ら、そして次の世代へ。

cf. 1980年代以降の自由主義神学の再評価の動向

バルトらの弁証法神学の批判的検討の必要性

1 バルトと弁証法神学

2. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

フォイエエルバッハの受容

神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

cf. ハルナックとの論争、神学の学問性をめぐって

3. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機 → 危機神学

キルケゴールのモチーフ

ヴァイスとシュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見の影響

終末論、しかも現在的終末論の強調

4. 宗教社会主義運動（スイス）、弁証法神学（危機神学、新正統主義、神の言の神学）の運動——ブルトマン、ブルンナー、ゴーガルテンら——

5. 30年代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言
弁証法神学を超えて、『教会教義学』（KD、「神の言の神学」）へ

6. 宗教と啓示との峻別

宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、不信仰としての宗教

7. まとめ

(1) フォイエエルバッハの宗教批判へのキリスト教神学からの応答の典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化 → バルト主義の弊害

(6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

2 ブルトマンと非神話論化

8. 聖書学者ブルトマン → バルトの弁証法神学への共感以降も、自由主義神学との関わりを保持。

9. 近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立
近代人は聖書的な宗教を信じうるか？

10. 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
11. キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
12. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み
創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに応答する人間。
人間存在の善性のメッセージ、信仰とは神の語りかけに対する「今ここ」の決断。

<参考文献>

- 1 ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻3）白水社。
- 2 H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
- 3 J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
- 4 森田雄三郎 『キリスト教の近代性』創文社。
- 5 深井智朗 『超越と実在 20世紀神学史における神認識の問題』創文社。
6. バルト関係：『カール・バルト著作集』『教会教義学』新教出版社。
大木英夫 『バルト』講談社、ユンゲル『神の存在 バルト神学研究』ヨルダン社、
大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』『恩寵と類比 バルト神学の諸問題』新教出版社。
7. ブルトマン関係：『ブルトマン著作集』新教出版社。
熊澤宣義 『増補改訂 ブルトマン』日本基督教団出版局。
笠井恵二 『ブルトマン』清水書院。
8. 土屋博 『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。
9. 『ブルンナー著作集』教文館。
10. 『ボンヘッフアー選集』新教出版社。